

hito\*yume  
インタビュー

巻頭特集

# 宇津木妙子

声は大きく、いつでもアグレッシブ。  
元全日本女子ソフトボールチームの監督で、  
現在はルネサス高崎女子ソフトボール部シニアアドバイザーを務める  
宇津木妙子さんはバイタリティに溢れる活動的な女性。  
そんな彼女の胸にはいったいどんな思いが詰まっているのでしょうか。  
群馬県高崎市にある選手寮エスポワールでお話を伺いました。







ユニチカ垂井で現役活躍当時の宇津木さん(サード塁上でランナーにタッチ)

# 近所の友だちのために 保育園を作りたい

小学生の頃からリーダー気質というか  
面倒見のいい子どもでした

**ちよっぴり寂しがりな  
ガキ大将少女**  
宇津木さんは小学生の頃、どんな  
子どもでしたか

両親が共働きで忙しかったこともあり、近所の子どもたち、それも男の子たちとばかり遊んでいるような子どもでした。女の子ながらガキ大将でしたね。そのころ作文に「近所の子どもたちはカキ子ばかりだから、みんなのために保育園を作りたい」なんて書いていたらしいです。自分だってカキ子だったのにね笑。その頃からリーダー気質というか、面倒見のいい性格でした。自分の両親が忙しく、寂しさを感じることもあったからこそ、下級生の子たちにはそんな思いをさせたくないというのがあったのかもしれない。

「両親をきょうだいとの関係は

わたしは5人きょうだいの末っ子。兄が3人と、姉が1人います。兄や姉父はわたしをとても可愛がってくれていましたから、厳しくしつけるのは母の役目という雰囲気できていましたね。おかげで随分と負けん気の強い性格になりました笑。母はわたしの負けず嫌

な性格を知っていてそついうスタンスをとっていたのでしょね。

**熱意に溢れる  
「指導者」との出会い**

印象に残っている「先生」のお話を聞かせてください

一番印象深いのは、中学に入って出会ったソフトボール部の顧問の先生ですね。勉強よりもソフトボールが好きでいらしゃって笑。ああいう先生を熱血っていつたてしょね。ソフトボールに対する思いの強さがとても印象的な先生でした。練習時間中は休憩をさせてもらえず、しんどくて嫌だなあとも思っていました。その先生の熱意に押し切られた格好でしたね。ただ、練習で遅くなるときはわざわざ家まで送ってくれたり、厳しいだけの先生ではなかったからこそ、先生の人柄に惹かれるように、ソフトボールにハマっていったというのがあります。県大会優勝を目指していたのですが、残念ながらそれは叶いませんでした。いいところまでは行っただけですけどね。それで高校でもソフトボールを続けて、雪辱を果たそうと思いました。

**高校時代にはどんな先生との出会いがありましたか**



中学校1年生の頃よりソフトボールを始めた宇津木さん(前列右から2番目)

高校時代は印象的な先生が何人もいらしゃいました。

まず当時の校長先生。作業服を着て川の掃除をしていらしたり、お花の手入れをしていたり、朝礼であいさつをされるまで、校長先生とは知りませんでした笑。言葉よりも行動することの大切さを教えてくださった先生です。それからソフトボール部の顧問の先生。随分厳しく指導してくれました。

選手としての技術的なことだけではなく、人としての礼儀や、仲間の大切さを教えてくださった先生です。それから担任の先生。顧問の先生の指導が厳しすぎるのではないかと、わたしたちのためによく口論をしてくださっていました笑。

高校時代っていつのは、子どもから大人になっていく時期でもあり、大切なことをいろいろと学ぶタイミングですね。だからこそ、高校時代の先生の影響って今でもわたしのなかで、ものす

# 何人もの先生のよいところを 少しずつ分けてもらいました

いろんな先生から受けるたくさんの影響。  
それが子どもの人格をかたち作っていくと思う

ごく大きなものです。ひとりの恩師に育てられたというよりは、いろいろな先生のもっているよいところを少しずつ吸収させていただいたという印象です。

**”あいさつの大切さ”  
人間関係“の面白さ”**

高校を卒業後に入社されたユニチカ垂井では、寮の管理をされていたと伺いましたが

ええ。ユニチカ垂井時代、社員寮で寮母のような仕事をさせていただきました。母のような仕事をさせていただきました。

当時はパソコンなんてないですから、顔写真入りの履歴書をもとに、寮生のリストを手書きでまとめていました。しかも布団やバケツ・洗面器といった会社からの支給品にはすべてわたしが寮生の名前を書き込んでいたんです笑。そこまでは、さすがにわたしたちでもその子たちの名前を覚えられますよ。名前を覚えれば、就職してきたばかりの子を「何々ちゃん」として名前を呼んであげられるじゃないですか。新しい環境に慣れてない子が名前を呼ばれると、それは喜んでくれました。「なんでわたしの名前知っているんですか?」なんて。

寮にいた子は、みんな定時制の高校に通っていたから、学校に行くときは名前を呼んで「何々ちゃん!」行って来いよ!って大きな声で送り出してあげてます。わたし、いつでも元気だから笑。初めはみんな大きな声で返事をしてくれるんですが、ふいに返事の声が小さくなる時があるんです。それは何か悩みを抱えているときのサインなんです。だからそんなときはタイミングをみて、おいとつしたって声をかけてあげる。

**悩みを聞いてあげるきっかけを作るのです**

だから人の名前を覚えることや、あいさつってホントに大切ですよ。ユニチカケーションの基本っていつのはそういうことだと思えます。偉くなると、黙って仕事場に入ってくるような人、いるじゃないですか。でもね、そついつ人こそ、誰よりも大きな声であいさつをしなくちゃいけない。人の上に立つ人が大きな声であいさつすれば、みんな必ずそれに応えてくれますよ。だから今の子どもたちに元気がないのは、先生たちの声がいかに小さいかというところもあるのかもしれない笑。



# 声を出してあいさつをする それだけでその場がピッと引き締まる

目上の人、子どもにとっては先生こそが  
誰よりも大きな声であいさつをしてあげてほしい

「三つの約束」で  
子どもの元気を引き出す  
最近では、社会的な活動にも力を  
入れていらっしゃいますね

社会的についてと大げさですが、小  
学生対象のソフトボール教室の指導役  
として呼ばれることは多いですね。そ  
の際、わたしは子どもたちと「大きな  
返事」「目を見て話を聞く」「呼ばれた  
ら走って集合」「三つの約束」を交  
わすようにしています。「ミニミニゲー  
ション」やあいさつを大切に考えているから  
なんです。

面白いですよ。小学生に「三つの約束  
わかった」と聞いて聞くでしょ。みんなは  
いって返事するんだけど「立って」と言  
うと黙って立つちゃったのね。「違っ  
てよー」言われたら返事でしょー」と激を  
飛ばす。その後で「立って」「はい」「座っ  
て」「はい」の繰り返しを3分くらい続け  
るんです。そうしてから「立って」と言  
った後に続けて「立って」というので、みんな  
反射的に座っちゃったんですよ。そこで  
「おまえらー！ ちゃんと聞けー！」とお説  
教をする。これは子どもたちが指示を  
受けたときに、それを耳で聞いていつか  
り理解したうえで行動する、そんな習  
慣をつけさせたいからなんです。それに

声を出さずしてすぐ明るく元気になれ  
ますし。「ファイト！」「オー！」って声を  
かけ合いながら子どもたちと走っている  
のを見て、参加された小学校の先生た  
ちはみんな子どもたちがすごく元気な  
ことに驚きますよ。「こんな子どもたち  
は見たことない」。

**中途半端なしかり方では  
選手の心に響かない**

「理解して行動する」というのは  
実は難しいことも知れませんか

同じことは、ルネサス高崎のソフト  
ボールの選手たちにも求めてきたつもり  
です。

わたしはルネサス高崎の総監督を務  
めました。もともとは前身である日



立高崎に「トレーニング」をテーマとして招か  
れたのが、このチームと関わるきっかけ  
でした。当時の若い選手たちに夢を訪  
ねると「一部リーグへ上がる」とい  
う答えが返ってきました。確かに当時  
の日立高崎は三部リーグをうろうろし  
ているチームでした。でも彼女たちはも  
とも関東のソフトボール選手の中のエ  
リートたちなのです。そこで、彼女たち  
が先人観から必要以上の劣等感を抱い  
ていることに気がきました。そこでわた  
しはまず彼女たちにわたし自身がこな  
してきた練習メニューを課しました。結  
局自信を付けさせるには練習量しかあ  
りませんからね。一部リーグでプレ  
イニング「チ」だったわたしの言うことは  
絶対だと思ったのでしよう。選手たちは  
必死で練習についてきました。チームは

**子どもたちと**

**本気の「ミニミニ」ゲームを**

今、小学校の先生たちに望むこと  
はありますが

わたしは子ども時代「コンプレックスの  
固まりでした。選手時代もほかの誰  
よりも知られることが多かった人間  
です。そのころは「はい」「はい」すいませ  
ん！」を口癖のように声に出していた。  
でも、わたしはそんなできない自分  
を認めていました。できる自分もでき  
ない自分も全部ひくるめて、自分「な  
んだと。だから気持ちはいつも楽でし  
たね。けれど今の子どもたちは、それ  
が少し苦手なように思います。だから  
大人たちが代わりに子どもたちの人間  
性を見てあげてほしいと思います。

テストで100点をとれなかったとき  
には、お母さんに答案用紙を見せない  
という子どもに会ったことがあります。  
できない自分を見せると、母親が失望  
してしまつと思つているんです。これ  
も結局は大人と子どもの「ミニミニ」シ  
ョン不足が問題なのでしょう。とにかく  
先生方にはできるだけしっかりと子ども  
たちを見てやってほしいと願っています。  
さまざまな個性を認め、それを大きく  
伸ばしてあげてください。

実際、少しずつその実力を上げていきま  
した。そんな成果が認められたのが  
その後わたしは監督への就任を申し込  
まれました。

監督就任当時の日立は完全な男性社  
会。女性監督の就任を歓迎するムード  
はほとんどありませんでした。わたし  
を応援してくれる人たちの期待に込め  
るには、とにかく強いチームを作るしか  
ありませんでした。そこで、わたしが  
取り組んだのは選手たちに練習後のレ  
ポート作成を命じること。その日の練  
習メニューや感じたこと、思ったこと  
何でも書くように指示しました。こう  
したレポート作りを通して、頭を使っ  
たことを選手たちに求めたんです。何  
のための練習か、自分は何が苦手なの  
か、選手たちにはそのことをしっかり理  
解してもらいたく思います。

**宇津木流の上手なしかり方を教え  
ていただけますか**

そんな大層なものではないけど、わ  
たしは監督として、なぜにかつているか  
を明確にする「ミニミニ」その時すべ  
しかる「ミニミニ」を心がけています。なぜ  
かつているのかを明確にするのは、選手  
たちの問題点を曖昧にせず、はっきり



自らバットを握り、選手に連射ノックを浴びせる宇津木さん(ルネサス高崎総監督時代)

# 子どもたちをしっかりと見つめ 個性を認めてやってほしい

いいところだけでなく、欠点も認めてやれる  
そんな大人が増えればいいですね



次の夢は、  
子どもたちとのふれあい

今後はどのようななかたちで、ソフトボールにかかわっていかれる予定ですか

わたしの夢はすべて叶いました。日本の女子ソフトボールチームは金メダルをとったし、ルネサス高崎女子ソフトボール部は2008年に3冠を達成。そういう意味で2008年は本当に幸せな年でした。ちょっと異常なくらい笑。

ただ、ロンドンオリンピックではソフトボールが種目から外され、その後どうなるかはまだわかりません。まずはソフトボールがオリンピック

の種目に復活できるように尽力していきたいです。

また、今考えているのは子どもたちの育成。現代の子どもたちを取りまく環境はすごく豊かなんだけれども、豊か過ぎちゃって、子どもたちの人間性がちょっと寂しく感じられるんです。わたしの大きな夢がいくつも叶ったのは、多くの先生方・指導者の皆さんとの出会いがあったからこそ。わたしにはソフトボールしかないから、まずはキャッチボールを通じて様々な「出会い」のサポートをして、親子・先生と子どもとの会話の場が作れたらいいなと思っています。できたら日本中をキャラバンのように巡って、子どもたちとふれあいたいですね。

宇津木妙子(うつぎ たえこ)プロフィール

中学時代にソフトボールと出会い、星野女子高等学校を経てユニチカ垂井で活躍。内野手として日本代表チームに参加し、1974年の世界選手権では準優勝の成績を収める。その後は、ジュニア日本代表チームのコーチを経て、日本リーグ初の女性監督として日立高崎(現・ルネサス高崎)監督に就任。96年アトランタ五輪では日本代表コーチを務め、代表監督に就任した00年シドニー五輪では銀メダル、04年アテネ五輪では銅メダルを獲得。2大会連続のメダル獲得に貢献した。その後、ルネサス高崎の監督職を譲り、自らは同チームの総監督に就任。09年2月より総監督を退任し、シニアアドバイザーに就任。



第12回全国ソフトボール選手権大会(1983.11)の様子(ユニチカ垂井時代)

著書紹介

- 『チームワーク』学陽書房(2001.6)
- 『努力は裏切らない』幻冬舎文庫(2004.7)
- 『金メダルへの挑戦』学陽書房(2004.9)
- 『ソフトボール眼』講談社(2009.1)

『宇津木魂』

女子ソフトはなぜ金メダルが獲れたのか  
宇津木妙子著 文藝春秋(2008.10)777円



北京五輪で金メダルを獲得した女子ソフト。「育ての親」が、世界一の選手育成法を語る。「男前な女」はこうやって育てよう。

